

2025 年度 YOKOHAMA-SXIP 派遣プログラム参加学生の声

氏名			
所属	経済学部 経済学科 LBEEP	学年	学部 2 年
派遣先大学	Panjab University		
期間	2025/09/14～2025/09/26		

派遣先大学での研修や語学面で学んだこと

チャンディガール滞在終盤で体調を崩したため、インダストリアルツアーでは半導体の基板を製作する工場しか見に行けなかった。基盤の製作にはドイツや中国の機械が使われており、基盤製造装置において日本勢の魅力が薄いように感じられた。ただ日本とのつながりもあり、その会社はスズキやホンダの現地法人に自動車部品としての基盤を製作していた。

インド英語に癖があることは事前に YouTube など学んでいたが、実際 Panjab 大学の学生たちの発音は、想定していたよりも聞き取りやすいものだった。特に、SXIP 学生として選ばれて横国に来た学生たちの発音はかなり聞き取りやすかった。インドでは地域間での言語の差が如実であり、特に北インドの言語(ヒンディー語など)と南インドの言語(タミル語など)では完全に言語が異なるため、同じインド人同士ですら英語を共通語として用いているということだった。結果、彼らは大学の中でも日常的に英語を話さなければならないという。彼らの英語のレベルは少なくとも自分よりもかなり上で、C1 か C2 のレベルがあると思われた。そのため、議論の際など深い話をする、英語の語彙面でかなり苦勞する羽目になった。

渡航前の 2 週間ほど、SX 課題についてインド人学生と協働し発表した。英語のレベルも拙いし、専門分野の理解もまだ不十分で、伝えたいことがうまく伝わらないなど、悔しい思いを多々抱いた。また、環境問題に関して、我々は先進国の立場から、彼らは「発展途上国」の立場からの議論になったため、「先進国がかつてやってきた環境汚染を我々も先進国になるまでは行うだけだ」という彼らのスタンスと、どう向き合うのかかなり難しかった。

横国ではあまり知名度のない本プログラムであるが、Panjab university chemical engineering faculty では、倍率が何十倍もある、大変人気な PJ であるようだ。そのため選抜も熾烈で、教員の前でプレゼン発表を行わなければならないらしい。そうして選ばれた SXIP 学生は、モチベーションが非常に高く、また要領も良い生徒で、粒ぞろいだった。インドに行ってみて、英語や学部教育など、いままで以上に本気で大学の学業を頑張るべきだと感じるようになった。

派遣先の国の生活面、文化や社会的なことで、学んだこと

インドと日本では完全に清潔感が異なっていた。まず前置きとして、Panjab 大学のあるチャンディガール市は、インドの中で最も清潔だと言われる。これは、2 次大戦後パキスタンが分離独立したことで残された東パンジャーブ地方に、インド政府主導でチャンディガール市を計画都市として設計したことに起因する。その都市を設計したのは、日本では国立西洋美術館の建築家として有名な、ル・コルビジエである。街は京都のように碁盤の目のようであり、“Sector”という単位で区切られている。4 つの Sector の接する点ではラウンドアバウトが整備されている。そのため、とても整然とした街並みが特長だ。また、街路樹や自然との共生も考慮されており、緑が多いのも特徴だ。

そんなきれいなはずのチャンディガール市であるが、それでもごみ箱以外の所に散らかるごみの山。生ごみがむき出しで公共のごみ箱に捨てられていることで徘徊するネズミ。また各所各所で漂う糞便の臭い。舗装道路の隅にはなぜか泥。かなりきつかった。

社会面では、貧富の差を感じた。インドではタクシーだけでなく、トゥクトゥク、リキシャ、オートといった 4～5 人乗りの 3 輪バイクの乗り物が存在していた。トゥクトゥクは EV で、リキシャ・オートはディーゼル車だという。その運転手は、かなり貧しいことが想定された。というのも、日本のタクシーは高いというイメージがあるだろうが、インドのタクシーなどは、非常に安かった。現地でトゥクトゥクを 5 人で乗った場合、インド人が交渉すれば合計 50 ルピーで 15～20 分程度乗車できる。為替上は日本円にして 75 円、インドの物価を考慮しても 200 円程度だろう。ここまで安いので、地元の学生も日常的にトゥクトゥクなどを利用していた。さらには信号待ち渋滞の車列に突っ込んでおもちゃを売る人、赤子を抱えてお金をせびる物乞いなど、貧しい人がたくさんいた。その一方で、エランテモールのように、ブランド品を売るテナントの多く入ったショッピングセンターだったり、お金持ちの住むエリアだったり、一般的な日本人の住む家よりも広い家に住む大学教授だったり、裕福な層も存在した。かつてよりも経済が発展し、富裕層が誕生し始めているということなのかもしれない。

物乞いがあまりに積極的なので引いてしまったが、現地のインド人でそういった彼らにお金を恵む者はいなかった。多くのインド人学生から、彼らにお金を恵まないように忠告を受けた。インド人学生の多くは、彼らが働けるのに働こうとせず、楽して生きようとしているのだから、そんな彼らを助ける義理はない、と話していた。日本ではそういった人に出会ったときに見なかったふりをして気まずく立ち去ってきたが、インド人の彼らは彼らなりに無視する論理思考を持っており、どんなに金を無心されても堂々と無視していた。ここに日本人とインド人の心理面での違いを感じた。

恋愛観や結婚観は、かなり旧時代的なものだと感じた。自由恋愛は基本的に許されておらず、親の選んだお見合い婚がほとんどだという。特に女子においては親からの束縛が激しく、一人暮らしの子も実家暮らしの子も、親から毎晩電話がかかってくる。それでも、大学にいる間は人生の春休みとでも言えよう。親の監視の外で、堂々と同大学の学生とデートができる。ここに私は、はかなさを感じた。

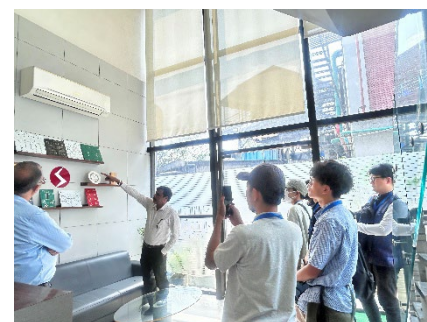
日本では大学進学だったり、就職だったり機に、一人暮らしを始める人も多いだろう。だが、インドでは基本的に、大学では学生寮に住んでも、大学を卒業したら家族と住むらしい。さらに家父長制のため、歴史的に妻が自分の実家を出て、夫の実家に住むそうだ。これは帰ってから調べたことだが、Patrilocal Residence と呼ばれる慣習で、ヒンドゥー教徒の共同体に深く根付いているようだ。

来年度プログラム参加を考えている学生へ

人生で一度はインドに行ってみようと思えるのであれば、ぜひ応募してみよう。衛生面や安全面など不安な点から気おくれしてしまうこともあろうが、実際行ってみれば案外何とかなる。私は香辛料には強い方なのだが、それでもおなかには壊してしまった。しかし、道路沿いのストリートフードや、シク教の寺院グルドゥワラにて手渡して頂いた Kada Prasad など、飲食を冒険したことは後悔していない。一泊二日で入院したことも、今となっては良い思い出だ。

また、SXIP をより魅力的にしているものは、ただインドへ旅行に行くだけでは知り合えなかったであろう、たくさんのインド人学生と交流することができたことだ。現地学生と映画『鬼滅の刃 無限城編』やクレヨンしんちゃん、ドラえもんなどの話題で盛り上がることはできたのは、日本のソフトパワーの強さや、日本への愛を感じられ、非常に良かった。もう一度彼らと対面で話したい、彼らと盛り上がりたいと思うほどに、いい友人ができたように思う。

視点をマクロに移そう。2025 年 4 月版の IMF 世界経済見通しでは、2025 年には日本の GDP がインドに抜かれ、日本の GDP ランキングは世界 5 位へと後退すると予想されている。GDP 規模で言えば、日本とインドはほぼ同じくらいになる。この二国が協働することで世界に果たせる役割が何か。SXIP に参加し、インドに行ったことで、インド関連や日印関係のニュースについて注目するようになったのは、とても良い収穫だと自負している。



2025 年度 YOKOHAMA-SXIP 派遣プログラム参加学生の声

氏名			
所属	横浜国立大学経済学部	学年	4 年
派遣先大学	Panjab University		
期間	2025/9/14 ~ 2025/9/26		

派遣先大学での研修や語学面で学んだこと

日本とインド両国の文化や社会問題について、インド学生と英語で議論を交わすことができた。インド学生は、様々な社会問題について議論をすることが好きな人が多く、日本の財政状況について興味を持ち質問をしてくれた学生もいてとても驚いた。この経験の中で、英語で議論する際は難しい語彙を多用する必要は一切なく、A2 レベル（高校英語レベル？）で自分の伝えたいことをしっかり伝えることが大切であると実感した。同時に、各国の文化・社会問題についてまずは日本語で理解・説明できなければ、議論のスタートラインにすら立てないということを痛感した。

派遣先の国の生活面、文化や社会的なこと、学んだこと

礼拝所などでの寄付金は多く払いすぎると良くないということを学んだ。その国の物価、1日3食にいくらかかるかを事前に把握した上で、寄付金の金額を決める。多く払いすぎると「日本人は多く払ってくれる人種」だと勘違いされて、今後インドにいく日本人たちに迷惑をかけてしまうからだ。タクシーの値切りも同様。強気でいくことが今後インドにいく日本人たちを間接的に助けることになる。

来年度プログラム参加を考えている学生へ

インドへ行かれる方はワクチンを打ってから渡航することを強くお勧めします。





2025 年度 YOKOHAMA-SXIP
派遣プログラム参加学生の声

氏名			
所属	理工学部化学生命系バイオ EP	学年	2
派遣先大学	Panjab University		
期間	9/15～9/26		

派遣先大学での研修や語学面で学んだこと

Panjab University では授業を受ける訳ではなく、インドの学生や先生達と一緒に大学を案内してもらったりしました。また、工場の見学などのツアーを学生が企画してくれていて、いろんな場所に連れて行ってもらいました。学生同士は英語で話すので英語の練習にもなりました。また、日本語を教えたり、逆にヒンディー語を教えてもらうことで、英語以外の言語にも触れられるいい機会でした。

派遣先の国の生活面、文化や社会的なことで、学んだこと

文化は全く違いますし、Panjab University のある Chandigarh は特に都会という感じではないので、生活の仕方も関東での生活とは全然違いました。

来年度プログラム参加を考えている学生へ

インドは自分ではなかなか行かない国だと思います。思い切ってこのプログラムに参加してみると、自分が今まで知れなかったことがたくさん知れると思います。

2025 年度 YOKOHAMA-SXIP
派遣プログラム参加学生の声

氏名	Yusei		
所属	理工学部電子情報システム学科	学年	3 年
派遣先大学	パンジャブ大学		
期間	9/14～9/26		

派遣先大学での研修や語学面で学んだこと

- ・インドで英語を話す練習をすることはとても良い環境だと感じました。ヨーロッパ、アジアのたくさんの国に渡航したことがあります、インド人と中国人ほどよく喋る文化的な性格の人はいなかったです。その中でもインド人は英語を話すので、若干受動的な性格な日本人にとっては無理にでも話す機会が多いのでとても良い環境でした。
- ・派遣期間がインド学生の試験期間と重なっていました。図書館などでインド学生の勉強している姿を見ましたが、大きな分厚いノートにびっしり書き留めていることを多く見ました。学習面でも頑張っている姿を見ることができ、決して今の自分に満足することなく、勉強を頑張ろうという気持ちになりました。

派遣先の国の生活面、文化や社会的なこと、学んだこと

- ・ずっと電話をしていることが印象的でした。お喋りが大好きな国民性がまさに現れて面白かったです。5分に1回電話しているほどです。人によってはテキストメッセージをあまり見ないので、友達間でもあまり電話をしない人にとっては馴染みずらい文化だなと感じました。
- ・国民的なダンスや祭りが数多くあるインド学生に日本のダンスや祭りは何？と聞かれて困ったことです。花火大会しか答えられなかったですが、インドをほどダンスや祭りが多くないにしても、日本の文化的な知識を浅さも実感しました。

来年度プログラム参加を考えている学生へ

僕ら以前の学生から繋いでくれたものでもあり、パンジャブ大学と横浜国立大学の関係はとても良好です。学部長の先生もとても優しいのでぜひ安心して行ってほしいです。

2025 年度 YOKOHAMA-SXIP 派遣プログラム参加学生の声

氏名	R. S.		
所属	理工学府	学年	M2
派遣先大学	パンジャブ大学		
期間	2025/09/14-2025/09/26		

派遣先大学での研修や語学面で学んだこと

大学のカリキュラムは、手を動かす実験を重視していたのが印象的だった。自分は YNU の機械工学専攻であったが、学部 2 年までは座学中心だったのに対して、パンジャブ大学では学部 1 年生から手を動かして何かを作るような実技の授業をしていた。日本の大学よりも、現場で使える即戦力の育成を重視しているように見えた（日本の高専に近い部分があるのかもしれない）。インダストリアルツアーでは、PCB 基板、LED 光源、アイスクリームの計 3 つの工場を見学した。アイスクリームは日本の工場と同様にほとんどが機械によって製造されていたが、PCB と LED はラインに流れてきたものを人の手で組み立てていく方式で、機械を導入するよりも人件費のほうがかいなのだろうと感じた。語学面では、やはりインド人は英語の発音に特有の癖があったり、話すスピードが速かったりといった点で最初は理解に苦しんだ。しかし、逆に日本人にとって馴染みのある単語が伝わらない、ということもあり、お互い歩み寄ろうと日々一緒に話すことで、徐々にしっかりと会話ができるようになった。とにかく話し続けることで、英語を話すことへの抵抗感、恐怖も払拭された。

派遣先の国の生活面、文化や社会的なことで、学んだこと

基本的にインド人は細かいことを気にしない気質の人が多く、言われたとおりにならなかったり、建物の装飾が少しずれていたりといったことが自分は最初は気になった。しかし、決して悪気があるわけではなく、生まれ育った環境の違い、文化の違いとして認め合わなければならないということを学んだ。また、大体のインド人は英語を話せるものだと思っていたが、トゥクトゥクの運転手、飲食店の店員など、意外と英語が通じない人が多かったのにも驚いた。乞食もそこまで多くはないものの一定数いたので、格差はまだ残っていると感じた。

来年度プログラム参加を考えている学生へ

自分はもともとオーストラリアの UON を第一志望として応募したが、今年はプログラムの募集時点で UON に行く人が確定しており、枠が残されていなかったという話を聞いた。ただ、結果としてインドに行って良かったと思う。普通の旅行では経験できないほどに現地人と関わり、現地の産業を学ぶことができた。総じてこのプログラムは非常に有意義な機会であり、海外に興味のある人、自分が知らない世界を見てみたい人は、成長につながる絶好の機会だと思うので積極的に応募してほしい。

